千里キリスト教会　記念礼拝説教

日　　時　2017 年 09 月 03 日
聖書個所　Ⅰテサロニケ 04：13～18
説教主題　「主とともにいつまでも」
説 教 者　徳本　篤

序　文）
本日は教会堂の改修工事完成を記念する特別な礼拝です。そのために佐藤恵理子姉に特別讃美をささげて頂いたことを感謝します。この会堂は 1973 年（44 年前）に佐藤忠幸兄の設計によって建築され、1998 年（19 年前）に佐藤忠行兄のご遺志によって改修工事が行われ、「水色の教会」として地域の人々にも親しまれてきました。

しかし、歳月の経過とともに屋根や外壁の劣化が気になっておりました。この度、佐藤富美子姉からのご支援を頂き、それと教会が共同するかたちで屋根と外壁の改修工事を行い、見違えるほど新しく、奇麗になりました。早速も近所の方々から「奇麗になりましたね」と声をかけて頂いています。

本　論）
さて、本日の聖書個所の話題は、イエスが再臨される以前に天に召された人々は、再臨された時にイエスに会うことができるのか。彼らはそれでも復活できるのかという疑問でした。その質問にパウロが応えるかたちでこの手紙は書き進められています。

パウロは今日の箇所で、イエスにあって眠った人々が復活する時はイエスが再び来られる時だと明言しています。ただしその時がいつであるかについては明言を避けています。それは使徒 1：7 でイエスが語られたように、天の父のみが決めておられることで、人はそれについて知ることも語ることも許されていません。私たちにその時がいつであるかは知らされていませんが、確実にその日が来ることは決まっています。その日がいつ来ても良いように、心の準備と備えある生活をするように勧められています。

次の疑問は、イエスが再臨された時、眠った人々はどのような姿に復活するのかということでした。パウロはその見本としてイエスご自身が復活されたときの姿を挙げています。復活の身体は、もはや死はなく、病もなく、完全な姿に変えられるのです。そのように、いつまでもイエスとともにいることになると言われています。

16 節－17 節には「主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。」と書かれています。「天」「雲」「空中」ということばに人間的な想像や思い込みを持ち込まないように注意しましょう。聖書では天、雲、空は神が臨在される場所を象徴するものです。

ある子どもが宇宙ロケットに乗って天高く昇って行くとして、天国はどれくらいのところにあるのか不思議に思いました。同じように大人も思い違いすることがあります。イエスが再臨された時に、信者たちが天高く舞い上がって行き、雲の中でイエスと再会することを想像した絵がありますが、聖書から逸脱した誤解です。

参考として、Ⅱコリント 12：4 にパウロがパラダイスに引き上げられた時の経験が記録されています。その時パウロは空中に舞い上がりませんでした。 マルコ 9：7 には雲の中から父なる神の声をペテロとヤコブとヨハネが聞いたことを記録しています。彼らは雲の中に舞い上がりませんでした。パウロが言っているのは、私たちの姿が一瞬のうちに変えられ、神のご臨在の中に移されることです。ただし、その復活には順番があります。先にイエスを信じて眠った人々がよみがえり、その次に生きていて再臨の日を迎えた信者たちが復活の身体に変えられます。

それでは何のために復活の身体に変えられる必要があるのでしょうか。二つの理由があります。
第一に、復活はイエスの救いが完成したあかしです。罪の赦しも、たましいのきよめも、いやしも、奇跡もみな素晴らしい神からの賜物です。しかし、復活がなければ、すべては空しく消え去っていきます。私たちの身体は滅びていくのです。救いの力はどこにあるのでしょうか。あるとすれは復活です。

第二に、復活はいつまでもイエスとともにいるために必要です。なぜなら聖書には、血肉の身体は神の国を受け継ぐことができない、朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならないと書かれています。そのために復活の身体が必要です。

結　論）
今日の聖書の中心は「イエスを信じる者は、イエスが再び来られるときに、生きていても、死んでいても、皆がともに一瞬のうちに復活の身体に変えられ、いつまでもイエスとともにいることになる。」ということです。

適　用）
佐藤忠幸兄は 1998 年 4 月に医者から肝臓ガンの末期である告知を受けられました 3 月 26 日には 55 歳の誕生日を迎えられたばかりでした。ご本人と家族にとってどれほどの苦しみだったでしょうか。しかし、佐藤兄は驚くような行動をとられました。余命三か月か長くて半年だと知られた時、佐藤兄は奥さんと子どもたちの将来のためにこれから準備することを大学ノートに書きだし（私も見せていただきました）、それを一つずつ実行していかれました。死に立ち向かう決意を示されたのです。千里教会のことも心配し、自費で教会外壁の塗装工事を知り合いの業者に依頼されました。10 月 4 日に工事は完成し「水色の教会」に生まれ変わりました。98 年 11 月 15 日は佐藤兄が礼拝に出席された最後の日になりました。高槻市安岡寺町から重い酸素ボンベを引きながら、千里教会の階段を息苦しそうに懸命に昇り、最後の礼拝に出席されたのです。ご自分でも「今日の礼拝が最後だ」と言っておられました。何と、礼拝の後には周りの数名の人たちと記念撮影をされました。その言葉通り、6 日後の 11 月 21 日の朝に天に召されました。

私たちにとって死は人生の最後ではなく、通過点です。イエスの復活を信じる者には、むやみに死を恐れたり、悲しみにうち沈む必要はありません。むしろ死に立ち向かって生きることもできると思い直しましょう。